

ミミは「かわいそうな女」か？

経営システム工学科 2年 A. C.

ラ・ボエームは椿姫のリメイクといわれている。椿姫の悲劇のヒロイン、ヴィオレッタは相手のアルフレードのために華やかなパトロンでの生活を捨てたり、偽りの愛想づかしをしてまでも相手の幸せを願い、悲惨な運命をたどっていった。大きな犠牲を払ったにも関わらず、悲惨な結果に終わってしまうところに、共感を得るのであろうが、ヴィオレッタと比較をすると、ミミは何か犠牲を払っただろうか。いや、特に何も犠牲を払ってはいないであろう。それなのに、ミミを一般的に「かわいそう」と思わせる要因は何なのか。それはおそらく対照的なムゼッタの存在である。華やかで自分勝手なムゼッタと比較されることで、ミミという人物が「控え目」や「清楚」「かわいそう」というように思われるのだろう。

しかし、本当にミミという人物は「かわいそうな女」といえるのか。映画版のラ・ボエームでのミミの行動を冷静に評価し、ミミという人物について考える。

まず、第1幕でロドルフォがひとりになったところへミミがやってくる場面では、ミミは自らわざと蠟燭の火を消し、それを口実にロドルフォのもとを訪れる。しかし、ミミには部屋に残っているのがロドルフォである、ということを知ることではできなかったのではないか。なぜなら、ミミの部屋のドアの近くには窓もなく、ドアには覗き穴もないからである。声だけで部屋にいる人物を特定できるとは思えない。このことから、ミミはすでに自分の体が徐々に弱っていていることを感じていて、もしかしたら今しか恋をすることができないかもしれないと思い、とりあえず誰でもいいから男性と関わりを持ちたかったのではないかと私は思った。もしそうだとしたら、蠟燭を自ら消して口実としたミミはかなり計算高い女性であるといえる。

また、鍵を落としてしまう場面も、私はミミの計画的な行動ではないかと考える。せつかく知り合ったロドルフォともっと関わりを持ちたかったのではないかと。男性の部屋に入ったのだから、次に来る口実を作りたいと思うのが自然だと思う。ミミの狙いとしては、鍵を落とすことにより、見つからなければ見つからないほど、一緒にいる時間が増えると考え、最悪見つからなかったら泊めてもらうという考えもあっただろう。

さらにミミという人物を追っていくと、第1幕の中でミミはとても恋の駆け引きが得意かもしれないと思う場面がある。それは大好きなものの話をしているときに「つまり、“詩”という名で呼ばれているもの」と言ってロドルフォを

誘っている場面である。その後ロドルフォが誘いにのり、ミミにキスしようとするがミミは避けて歌い続ける。しかし、その後自らキスしているように見えることから、ミミは自分本位な性格だと思われる。見方によっては、最初のキスを受け入れてしまうと「尻軽の女」と思われるかもしれない、とミミは考え、あえて「純粋な女」を演じるために避けたのかもしれない。もしそうであるならば、やはりミミは計算高い女だといえる。

そして第2幕のロドルフォがミミにボンネットを買ってあげる場面では、ロドルフォが「急ごう、仲間が待ってる」といったのに対し「このボンネット似合ってる？」といていることから、ミミはかなり自己中心的な性格だと思われる、独占欲も強いと考えられる。

また、カフェ・モミュスの場面では、ミミがムゼッタに対して「私たちはこんなにラブラブよ」といわんばかりにラブシーンを見せ付けているように思われる。ムゼッタのことを「かわいそうな女」といっているにも関わらず、ラブシーンを続けていることから自分さえよければと思っているのかもしれない。

第3幕の最後では、「お別れ」といいつつロドルフォに「ボンネットをもって」といっていることから、ミミのロドルフォをまだ束縛したいという気持ちがうかがえる。いままでのミミの行動や言葉から、ミミは一度自分を好いてくれた男性には自分のことを忘れて欲しくないと思っていて、結局はずっと自分にしか興味をもって欲しくないと思ったのではないか。「椿姫」でも似たような場面がある。ヒロインであるヴィオレッタが死に際に、他の人と一緒になってね、といいつつ自分の肖像画を相手に渡して死んでいく。現実では直向きな女性も存在すると思うが、オペラの女性は男性に対する束縛欲および独占欲が強いという傾向があるのではないだろうか。

第4幕の最期の場面でも、「眠ったふりをしたのよ 2人きりになりたかったから」というミミの言葉から、死ぬ間際でも計算高く、独占欲の強い女性であることがうかがえる。

一般的にはムゼッタのほうがミミよりも「イヤな女」と受け入れられることが多いと思われるが、このように冷静にミミの行動を見ていくと、私はムゼッタよりもミミのほうが「計算高くイヤな女」であるのではないかと思う。

ヴィオレッタと同様、悲劇のヒロインとされるミミ。病によって恋人と永遠にお別れをしなくてはならないということは悲劇かもしれない。しかし、特に大きな犠牲も払わなかったにも関わらず、最終的には周りの人から愛されながら死んでゆくという、幸運な運命をたどっていくことから、椿姫のヴィオレッタのように「かわいそうな女」であるとはいえないのではないかと私は思った。